

第 67 回漁業懇話会講演会プログラム

底びき網漁業における省エネルギー技術とその普及

日 時・場 所：平成 28 年 3 月 26 日（土）13:00-17:00 第 1 会場

企画責任者：藤田薫（水研セ水工研）・梶川和武（水産大学校）・山下秀幸（水研セ開発セ）

13:00-03:02	開会の挨拶	藤田薫（水研セ水工研）
13:02-13:10	趣旨説明	藤田薫（水研セ水工研）
第 1 部		梶川和武（水産大学校）
13:10-13:30	底びき網漁業の工程別の燃油消費の実態	長谷川勝男（水研セ水工研）
13:30-13:50	底びき網漁具の省エネルギー要素技術	山崎慎太郎（水研セ水工研）
13:50-14:10	超高強力網糸による省エネルギー	沖野 晃（島根水技セ）
14:10-14:30	網地の削減による省エネルギー	池田 怜（新潟水海研）
14:30-14:40	休憩	
第 2 部		山下秀幸（水研セ開発セ）
14:40-15:00	新型オッターボードによる省エネルギー	住友寿明（徳島農水総技セ）
15:00-15:20	低速曳網による省エネルギー	酒井健一・永松公明（水大校）
15:20-15:40	漁具全体の抵抗削減による省エネルギー	小河道生（水研セ開発セ）
15:40-16:00	省エネルギー技術の普及活動	溝口弘泰（水研セ水工研）
16:00-16:55	総合討論	藤田薫（水研セ水工研）
16:55-17:00	閉会の挨拶	梶川和武（水産大学校）

趣旨：

底びき網漁業では水の抵抗の大きな漁具を長時間に渡って曳きまわすため燃油の消費量が多く、収益性の向上のためには燃油消費量の削減が求められる。このような背景からこれまでに省エネルギー化に関する様々な研究が行われてきた。しかしながら、これらの技術が広く普及しているとは言い難い。本講演会では底びき網漁業の省エネルギー技術を整理して、普及のためには何が必要であるかを考える。

平成28年度日本水産学会水産増殖懇話会第1回講演会

クルマエビ増養殖の現状について考える

日時・場所：平成28年3月26日（土）13：00～17：30 第8会場

企画者 大平 剛（神奈川大理）

プログラム

開会の挨拶	高橋明義（北里大海洋）	13:00-13:05
栽培漁業	座長 大平 剛（神奈川大理）	
1. クルマエビ栽培漁業の技術開発		
	崎山一孝（日本海水研）	13:05-13:30
2. 放流用クルマエビ種苗の大量生産－現状と残された課題		
	水藤勝喜（愛知水産基金）	13:30-13:55
3. クルマエビの種苗放流効果について		
	浜崎活幸（海洋大院）	13:55-14:20
養殖	座長 奥村卓二（増養殖研）	
4. 養殖生産日本一、沖縄県でのクルマエビ養殖		
	松本源太（沖縄県車海老漁業協同組合海洋深層水種苗供給センター）	14:35-15:00
5. クルマエビ用の配合飼料の開発		
	越塩俊介（鹿児島大水産）	15:00-15:25
6. 閉鎖循環型陸上養殖施設を用いたバナメイエビ養殖		
	野原節雄（IMTエンジニアリング（株））	15:25-15:50
基礎研究	座長 浜崎活幸（海洋大院）	
7. クルマエビの疾病とその防除		
	伊丹利明（宮崎大農）	15:50-16:15
8. クルマエビの繁殖生理		
	奥村卓二（増養殖研）	16:15-16:40
9. クルマエビの性統御技術		
	大平 剛（神奈川大理）	16:40-17:05
総合討論	座長 大平 剛（神奈川大理）	17:05-17:25
閉会の挨拶		17:25-17:30

開催趣旨

日本のクルマエビ資源は年々減少し、現在の漁獲量はピーク時の約七分の一の500トン前後にまで落ち込んでいる。また、クルマエビの養殖生産量も最盛期の約二分の一の1600トンにまで減少した。クルマエビは日本人にとって最もなじみ深い魚介類のうちの一つであるが、一般の人が目にする機会はほとんどなくなってしまっている。クルマエビ資源を回復して漁獲量を増やすことと、クルマエビ養殖の問題を解決して養殖生産量を増やすことが求められている。本講演会では、クルマエビの栽培漁業および養殖に関する講演を通して、クルマエビ増養殖の現状を理解し、問題点を整理する。また、クルマエビ生産量の増大に向けた、基礎研究の事例も紹介する。

栄養塩添加による漁場生産力の向上

日時・場所：2016年3月26日（土）13:00-17:30 第10会場

コンパニナー：山本民次（広島大院生物圏科）、大嶋雄治（九大院農学研究院）、田中丈裕（里海づくり研究会議）、西川哲也（兵庫水技セ但馬）

講演課題

- 13:00-13:05 開会挨拶 大越和加（水産環境保全委員会委員長）
座長 西川哲也
- 13:05-13:25 趣旨説明～瀬戸内海の貧栄養化の過程と水産業への影響～
山本民次（広島大院生物圏科）
- 13:25-13:50 ノリ養殖漁場への栄養塩類供給手法の検討
原田和弘・宮原一隆（兵庫水技セ）・阿保勝之（瀬戸内水研）
- 13:50-14:15 海域への栄養塩添加と筑後大堰等の運用によるノリ養殖生産性の向上
三根崇幸・川村嘉応（佐賀有明水振セ）
- 14:15-14:40 ノリ養殖への新施肥技術：香川方式ノリスカート
多田邦尚（香川大瀬戸内圏セ）・宮川昌志・龍満直起（香川水試）・藤原宗弘（香川県）・阿保勝之（瀬戸内水研）・本城凡夫（香川大瀬戸内圏セ）
- 14:40-14:50 休憩
座長 田中丈裕
- 14:50-15:15 アミノ酸混和コンクリートによる微細藻類の増殖促進
中西 敬（日建工学株式会社）
- 15:15-15:40 沿岸域における鉄の動態理解に基づいた藻場修復への取り組み
山本光夫（東大海洋アライアンス）
- 15:40-16:05 栄養塩の供給－改訂版 磯焼け対策ガイドラインより－
綿貫 啓（アルファ水工コンサルタンツ）・藤田大介（東京海洋大海洋科）・
内田 智（水産庁漁港漁場整備部）
- 16:05-16:30 二枚貝増産のための施肥技術体系確立の試み（攻めの農林水産業の実現に向けた革新的技術緊急展開事業）について
山本民次（広島大院生物圏科）・中原真哉・平岡喜代典（広島県環保協）
- 16:30-16:40 休憩
座長 大嶋雄治
- 16:40-16:55 海域施肥に対する慎重論の立場からのコメント 門谷 茂（北大院水産）
- 16:55-17:25 総合討論 大嶋雄治
- 17:25-17:30 閉会挨拶 門谷 茂（水産環境保全委員会副委員長）

開催趣旨：我が国沿岸では、富栄養化を改善するため、窒素・リンの負荷量の削減を行ってきており、一定の成果を挙げた。その反面、負荷量が減少しすぎて貧栄養化した海域が見られる。例えば、瀬戸内海ではノリの色落ちは、明らかに栄養塩不足に起因しており、栄養塩添加によって葉体の色が回復することが実験的に分かっている。また、アサリやカキなどの二枚貝類の漁獲量の減少や、大型藻類が生長せず磯焼けが起こっている。植食動物による食害が大きな原因の一つであるものの、施肥等の栄養塩添加によってこれらの生物の生長が促進される事例も得られてきている。陸上農業における施肥は作物を作る上で普通に行われる行為であるが、海域への栄養塩添加（施肥）についての知見はほとんど無い。本シンポジウムでは、堰ゲートの開門や下水処理排水の運用なども含め、海域への栄養塩添加（施肥）の試みについて、先進的試行を紹介し、情報の交流を図り、もって今後の沿岸海域環境保全・修復のあり方について議論することを目的とする。

魚類人工種苗の形態異常：これまでとこれから

日時・場所：平成 28 年 3 月 26 日（土） 9：00—17：30 第 3 会場

企画責任者：有瀧真人（福山大生命工）・田川正朋（京大院農）・征矢野 清（長大海七）

- 9:00—9:10 開会の挨拶・趣旨説明 有瀧真人（福山大生命工）
- I. 異体類における体色・眼位異常の防除と理解** 座長：南 卓志（福山大生命工）
- 9:10— 9:40 1. 異体類の体色・眼位異常研究のこれまで 青海忠久（福井県大）
- 9:40—10:10 2. カレイ類の体色・眼位異常は左右性異常である 有瀧真人（福山大生命工）
- 10:10—10:40 3. ウシノシタ類に発現する体色・眼位異常 草加耕司（岡山水研）
- 10:40—11:10 4. 異体類の体色・眼位異常におけるホルモン系関与の可能性 田川正朋（京大院農）
- II. 重要魚類における形態異常の現状と防除の試み** 座長：照屋和久（水研セ西海水研）
- 11:10—11:40 1. ヒラメに発現する脊椎骨および顎顔面骨格の異常 芳賀 穰（海洋大）
- 11:40—12:50 休憩（昼休み）
- 12:50—13:30 2. マハタ・クエに発現する脊椎骨等の異常 辻 将治（三重農水）・
中田 久（近大水研）
- 13:30—14:00 3. ブリに発現する頭部骨格等の異常 堀田卓朗（水研セ西海水研）
- 14:00—14:30 4. ニホンウナギの種苗生産過程で発現する様々な形態異常 田中秀樹（水研セ増養殖研）
- 14:30—15:00 5. マダイにおける骨格異常と胚発生環境との関わり 澤田好史（近大水研）
- 15:00—15:15 休憩
- III. 形態異常研究における新たな視点** 座長：虫明敬一（水研セ西海水研）
- 15:15—15:45 1. 異体類における左右性異常を発生システムと遺伝子発現から追う 鈴木 徹（東北大院農）
- 15:45—16:15 2. 形態異常を卵質という古くて新しい課題から考える 征矢野清（長大海七）
- 16:15—16:45 3. 形態異常における研究手法の現状と今後 宇治 督（水研セ増養殖研）
- IV. 総合討論** 座長：青海忠久（福井県大）
- 16:45—17:25 総合討論
- 17:25—17:30 閉会の挨拶 田川正朋（京大院農）

企画の趣旨

栽培漁業により海産魚類の飼育技術が産声を上げてから約 50 年が過ぎた。これまで種苗量産の対象となった魚類だけでも 60 種を優に超える。ここに至るまでに飼育現場では多種多様な問題の解決が試みられ、それが技術力として蓄積されてきた側面もある。中でも様々な魚種、部位に発現する形態異常は技術開発の当初から大きな問題であった。近年、ヒラメをはじめとした異体類の形態異常に関しては、その発現機序が変態という生態的な特徴と関連付けて検討され、内分泌や遺伝子発現からも解明が進んできた。一方、他の魚種については脊椎骨の異常や頭部骨格の変形など防除策の模索が継続しており、「古くて新しい課題」となっている。この企画では、今まで行われてきた形態異常の研究を総括するとともに、新たな切り口と今後の方向性を提示することを目的とした。

地下水・湧水を介した陸—海のつながり：沿岸域における水産資源の持続的利用と地域社会

日時・場所：平成28年3月26日（土） 9：00—17：30 第4会場

企画責任者：小路 淳（広大院生物圏）・杉本 亮・富永 修（福井県大海洋生資）・小林志保（京大院農）・
本田尚美・谷口真人（地球研）

9:00-09:10 開会挨拶・趣旨説明 小路 淳（広大院生物圏）

I 地下水・湧水の調査手法、歴史的展開

座長：杉本 亮（福井県大海洋生資）

- 9:10-09:35 1. 水文学と水産学の接点および世界の研究動向 谷口真人（地球研）
- 9:35-10:00 2. 陸域の地形および地下水流動に基づく海底湧水の評価 齋藤光代（岡大院環境生命）・
小野寺真一（広大院総科）・清水裕太（学振（近中四農研））
- 10:00-10:25 3. ラドン、トロンによる海底湧水環境評価 杉本 亮（福井県大海洋生資）
- 10:25-10:50 4. 陸域を中心とした水循環モデル 大西健夫（岐阜大応用生物）
- 10:50-11:10 休憩

II 地下水・海底湧水と水産資源のつながり

座長：富永 修（福井県大海洋生資）

- 11:10-11:35 1. 地下水・海底湧水による海域への栄養塩供給 本田尚美（地球研）
- 11:35-13:00 休憩（昼休み）
- 13:00-13:25 2. 低次生産と地下水・海底湧水 小林志保（京大院農）
- 13:25-13:50 3. ニ枚貝類の生物生産に対する地下水・海底湧水の寄与評価 富永 修（福井県大海洋生資）
- 13:50-14:15 4. 魚類の群集構造、生産、多様性への影響 小路 淳（広大院生物圏）
- 14:15-14:35 休憩

III 地域社会における地下水・湧水活用とコンフリクト

座長：小路 淳（広大院生物圏）

- 14:35-15:00 1. 東北における地下水・湧水を介した取り組み 王 智弘（地球研）
- 15:00-15:25 2. 御食国—小浜の地下水を活かしたまち作り 田原大輔（福井県大海洋生資）
- 15:25-15:50 3. 水利用とエネルギー利用のトレードオフ 山田 誠（地球研）
- 15:50-16:15 4. アジア太平洋地域の水—食料と安全保障 遠藤愛子（地球研）
- 16:15-16:35 休憩

IV 総合討論

座長：富永 修（福井県大海洋生資）

- 16:35-17:20 総合討論 杉本 亮（福井県大海洋生資）
小路 淳（広大院生物圏）
- 17:20-17:30 閉会挨拶 富永 修（福井県大海洋生資）

企画の趣旨

沿岸海域の生物生産に不可欠な栄養物質の多くは、水を介して陸域から海域へと供給される。地下水・湧水（地上および海底の湧水）は多量の栄養物質を含むため、生物生産への寄与という面から非常に高いポテンシャルを有する。一方、地下水・湧水は人間生活において水・熱エネルギー資源としても重要であるため、陸域における水利用と海域における食料（おもに水産資源）生産の間にコンフリクトが生じやすい。地球温暖化が進行するなか、水産資源生産やエネルギー資源として重要な地下水・湧水の持続的利用を効果的に進めるには、水産学、水文学、生物学から地域社会の経済活動を含めた長期的・包括的な視座が不可欠である。当該分野の研究史、沿岸域における生物生産機構、地域社会における実践例と諸問題について総括し、水と水産資源をとりまく人間社会のあり方や、今後の学際的研究の可能性について議論する場を提供することを目的として、本シンポジウムを企画する。

<平成28年度春季大会シンポジウム>
三陸沿岸における水産業の復興と新たな水産人材育成
— 3大学連携三陸水産研究教育拠点形成事業の成果と今後の展望—

日時・場所：平成28年3月26日(土) 10:00 - 17:00 第5会場
企画責任者：田中教幸(岩手大三陸水研セ)・東海 正(海洋大)・菅野信弘(北里大海洋)

- | | | |
|---------------------------|---|----------------------------------|
| 10:00-10:10 | 趣旨説明 | 田中教幸(岩手大三陸水研セ) |
| I. 森、川、海の変化と保全 | | |
| 10:10-10:35 | 1. 集水域・河川・河口域での生態系調査について | 座長：荒川久幸(海洋大院)
竹原明秀(岩手大人社) |
| 10:35-11:00 | 2. サクラマスを活用した市民参加型モニタリング | 佐々木 剛(海洋大院) |
| II. 復興に向けた新たな増養殖技術の開発と普及 | | |
| 11:00-11:25 | 1. 三陸における魚介類の増養殖と技術開発 | 座長：阿部周一(岩手大三陸水研セ)
梶原昌五(岩手大教育) |
| 11:25-11:50 | 2. 三陸におけるクエの閉鎖循環式養殖について | 遠藤雅人(海洋大院) |
| 11:50-12:15 | 3. シロザケ稚魚の健苗生産に向けた腸内細菌研究 | 清水恵子(北里大海洋) |
| 12:15-13:15 | 休憩(昼休み) | |
| III. 新たな食品加工素材・加工技術の成果と活用 | | |
| 13:15-13:40 | 1. 三陸沿岸に求められる水産食品製造の技術革新 | 座長：小川廣男(海洋大)
三浦 靖(岩手大農) |
| 13:40-14:05 | 2. 岩手県産ワカメのブランド化に寄与する基礎研究 | 菅野信弘(北里大海洋) |
| 14:05-14:30 | 3. 岩手県産水産加工品の開発・商品化を目指した技術研究 | 鈴木 徹(海洋大院) |
| IV. 出口を見据えたマーケティング戦略の展望 | | |
| 14:30-14:55 | 1. 被災企業等に対するマーケット支援・パッケージングデザイン等の支援について | 座長：緒方武比古(北里大)
田中隆充(岩手大教育) |
| 14:55-15:20 | 2. 三陸ブランドの創出と知財戦略について | 和泉 充(海洋大院) |
| 15:20-15:30 | 休憩 | |
| V. 水産人材の育成 | | |
| 15:30-15:50 | 1. 新たな水産人材(水産プロモーター)の育成 | 座長：梶原昌五(岩手大教育)
田中教幸(岩手大三陸水研セ) |
| VI. 総合討論 | | |
| 15:50-16:50 | 総合討論 | 座長：田中教幸(岩手大三陸水研セ) |
| 16:50-17:00 | 閉会の挨拶 | 和泉 充(海洋大院) |

企画の趣旨

2011年3月11日に発生した東日本大震災により、三陸沿岸部は甚大な被害を受けた。岩手大学は、東京海洋大学及び北里大学と連携し、SANRIKU(三陸)水産研究教育拠点形成事業を2012年4月から推進している。2013年4月、新たに岩手大学三陸復興推進機構釜石サテライト棟を釜石市平田地区に竣工し、同施設内に従来の水産業に科学的根拠に基づく付加価値を加え、水産業の高度

化・水産品のブランド化を目指し、技術者の高度化教育研究や人材育成を行うための「岩手大学三陸水産研究センター」を設置した。本シンポジウムでは、研究成果が今後の研究教育拠点としてどのように結びつか議論するとともに、できるだけ早く研究成果を被災地に普及展開し、衰退する水産業から脱却した魅力ある水産業の確立を目指すものとして開催する。

<平成 28 年度春季大会シンポジウム>

水産物に関わる冷凍研究の課題と展望

日時・場所：平成 28 年 3 月 26 日（土） 9:30-16:30 第 7 会場

企画責任者：岡崎恵美子（海洋大院）・木村郁夫（鹿大水）・今野久仁彦（北大院水）・
福島英登（日大生物資源）・鈴木 徹（海洋大院）

9:30-9:35 開会の挨拶

岡崎恵美子（海洋大院）

I 冷凍基本技術の重要性

座長：木村郁夫（鹿大水）

9:35-10:00 1. 凍結 - 保管 - 解凍 3 ステップシステムと品質

鈴木 徹（海洋大院）

10:00-10:25 2. 水産物の冷凍保管条件と品質

岡崎恵美子（海洋大院）

II 生化学的制御による冷凍水産物の高品質化

座長：今野久仁彦（北大院水）

10:25-10:50 1. 筋肉内 ATP による変性抑制

木村郁夫（鹿大水）

10:50-11:15 2. 温度条件による寒冷収縮と解糖作用の制御

中澤奈穂（海洋大院）

11:15-11:40 3. ホルムアルデヒド生成制御の効果

福島英登（日大生物資源）

11:40-12:40 休憩（昼休み）

III 冷凍新技術

座長：鈴木 徹（海洋大院）

12:40-13:05 1. 食品冷凍への過冷却利用とその効果

君塚道史（宮城大食産）・小林りか（海洋大院）

13:05-13:30 2. 不凍タンパク質の活用

萩原知明（海洋大院）

13:30-13:55 3. 冷凍による寄生虫リスクの低減

竹内 萌（青森食総研）

IV 水産物の品質評価法の進歩

座長：岡崎恵美子（海洋大院）

13:55-14:20 1. 迅速かつ簡易的な氷結晶・組織観察法

河野晋治（前川製作所）

14:20-14:45 2. タンパク質変性評価法

今野久仁彦（北大院水）

14:45-15:10 3. アルデヒド類・ビタミン類による脂質劣化の評価法

田中竜介（宮崎大農）

15:10-15:35 4. 魚類ミオグロビンのメト化評価法

井ノ原康太（鹿大院連農）

15:35-15:45 休憩

V 総合討論

座長：今野久仁彦（北大院水）

15:45-16:25 総合討論

16:25-16:30 閉会挨拶

鈴木 徹（海洋大院）

企画の趣旨

世界の水産物貿易量は年々増加傾向にあり、それらのほとんどが冷凍され流通している。我が国で漁獲される魚介藻類や水産加工品もその大半は冷凍され、内外市場において品質、安全性、コストなど熾烈な競争の中で優勝劣敗を繰り返している。性状が不安定で諸々の条件に品質が左右される水産物の冷凍技術は水産業・水産加工産業を支える最重要の技術であることは明らかであり、製品の高付加価値化を求める産業現場から多くの課題が投げかけられている。しかし、「水産物に関わる冷凍研究に関するシンポジウム」は当学会の長い歴史の中で一度も開催されていない。そこで、本分野の研究者が一堂に会し、現在の研究の到達点と課題を整理し、将来に向かって展望を開くシンポジウムを開催する。

<平成28年度日本水産学会春季大会ミニシンポジウム>

エリアケイパビリティーアプローチによる漁村開発

日時・場所：平成28年3月30日(水) 9:00 - 12:00 第9会場

企画責任者：石川智士(地球研)・有元貴文(海洋大)・黒倉 寿(東大院農)・江幡恵吾(鹿大水)

9:00- 9:10 趣旨説明 石川智士(地球研)

9:10- 9:30 エリアケイパビリティーの紹介 渡辺一生(地球研)

座長：石川智士(地球研)

9:30- 9:50 1. フィリピン国パナイ島北部バタン湾の沿岸社会と小規模漁業

宮田 勉(中央水研)

9:50-10:10 2. フィリピン国バタン湾における“つくる漁業”とエリアケイパビリティーの向上

黒倉 寿(東大院農)

10:10-10:30 休憩

10:30-10:50 3. タイ国ラヨン沿岸の小規模漁業の多様性と重要性

江幡恵吾(鹿大水)

10:50-11:10 4. タイ国ラヨンにおける定置網導入によるエリアケイパビリティーの向上

有元貴文(海洋大)

11:10-11:30 5. タイ国漁村におけるエコツーリズムとエリアケイパビリティーの向上

堀 美菜(高知大黒潮圏)

11:30-12:00 総合討論

企画の趣旨

エリアケイパビリティーアプローチ(ACアプローチ)は、地域の独特な資源を見つけ、地域住民組織が活用と維持活動をすることで地方創生が促進されるとする新たな地域活性化モデルある。本ミニシンポジウムでは、このACアプローチを、

沿岸社会に適応する場合の可能性と問題点について、フィリピンとタイでのいくつかの事例を基に議論し、今後の漁業研究と漁村振興の新たな方向性を検討する。

漁業資源の今とこれから

日時・場所：平成28年3月30日（水） 13:00 - 16:30 第10会場

企画責任者：市野川桃子・岡村 寛（水研セ中央水研）

13:00-13:10 開会の挨拶・企画の趣旨説明 岡村 寛（水研セ中央水研）

座長：田中寛繁

13:10-13:35 1. 乱獲の現状—世界から見た日本の姿—
市野川桃子（水研セ中央水研）

13:35-14:00 2. 気候と漁業—我が国資源のレジームシフト—
黒田啓行（水研セ西海区水研）

14:00-14:25 3. 経済乱獲—利益を高める方法あれこれ—
檜山義明（水研セ日水研）

14:25-14:35 休憩

座長：黒田啓行

14:35-15:00 4. 底びき網が生態系に与える影響—海外における影響評価の取り組みについて—
田中寛繁（水研セ北水研）

15:00-15:25 5. 漁業が生態系に与える影響—単一種管理と生態系管理の違い—
岡村 寛（水研セ中央水研）

15:35-16:30 パネルディスカッション「日本の漁業資源をどう評価・管理していくか？」
パネリスト：平松一彦（東大大気海洋研）
吉田丈人（東大院総合文化）
河内直子（NPO 法人霧多布湿原ナショナルトラスト）

司会：市野川桃子（水研セ中央水研）

企画の趣旨

世界の漁業資源は危機に瀕しているのか？世界的な水産資源学者であるヒルボーン教授は、その研究成果を一般向けの著書「乱獲—漁業資源の今とこれから—（原題: Overfishing）」にまとめた。本シンポジウムは本書で語られている科学的な内容を概説した後、それぞれのトピックに関連する日本での最新の研究成果を紹介する。演者は、実際に

資源評価・管理研究に携わり、漁業データを活用している水研センターの若手研究者を主とし、パネリストとして大学やNPO法人から有識者を迎えた。総合討論では、「乱獲」で語られているトピックと講演内容をもとに広く議論をおこなう。特に、漁業データを日本の資源評価研究や実際の管理にどのように活かしていけばよいかを議論の中心とする。

水産資源の持続的利用と認証制度

—東京オリンピックで日本の水産物を提供できるのか?—

日時・場所：平成 28 年 3 月 30 日（水） 13：00 - 17：00 第 9 会場

企画責任者：海部健三（中央大法）・小川 健（専修大経）

<第 1 部>

13:00-13:05	開会の挨拶および趣旨説明	海部健三（中央大法） 座長：小川 健（専修大経）
13:05-13:35	1. 認証制度が必要とする基礎的要件	大元鈴子（地球研）
13:35-14:05	2. 海洋管理協議会（MSC）と日本の漁業	鈴木 允（MSC 日本事務所）
14:05-14:35	3. 養殖管理協議会（ASC）と日本の養殖業	前川愛子（WWF ジャパン）
14:35-15:05	4. 日本の水産業と認証制度の現状	勝川俊雄（海洋大）
15:05-15:20	休憩	

<第 2 部>

15:20-16:55	討論	座長：海部健三（中央大法）
15:20-16:00	5. パネル討論	秋山貴彦（パルシステム生活協同組合連合会） 山本泰幸（イオントップバリュ株式会社） 若松宏樹（水研セ中央水研）
16:00-16:55	6. 総合討論	
16:55-17:00	閉会の挨拶	水澤寛太（北里大海洋）

企画の趣旨

水産資源の減少が世界的な問題となっているなか、漁業・養殖業に対する認証制度を通して、資源の持続的利用を推進する国際的な動きが活発になっている。2016 年開催予定のリオデジャネイロオリンピック・パラリンピックでは、大会開催期間中に提供する全ての水産物を、国際的な認証制度によって認められた製品に限定した。しかしながら、日本における水産物認証制度の認知度

は低く、現在のところ国際的な認証を受けた水産業は 2 件しか存在しない。2020 年に開催される東京オリンピック・パラリンピックでリオと同様の基準が当てはめられた場合、ほとんどの日本の水産物の提供は不可能になる。本シンポジウムでは、水産物認証制度の現状と課題を学ぶことを通じて、参加者とともにも日本の水産業の将来について考える。